

学級経営(2)

福代昭二

I はじめに

学校の教育計画を具体的に実践に移すとき、その基盤となるものは究極的には学級である。学級は、学校教育を行うために組織された最も基礎的な児童・生徒の集団の単位である。学級の経営に当たる学級担任の教師は、学校における教育上の諸条件を整え、教育の目的を効率的に達成するよう努力する。それは、恒常的な仕事であって、学校において日々展開される教育活動と一体的な姿勢を保ちつつ学級として个性的に実践に移すものである。

学級担任の教師の学級における業務には次のものが考えられる。①学校の教育目標の具現化(学級化) ②学級の教育の組織化 ③学級の教科指導の経営 ④学級の道徳教育の経営 ⑤学級の特別活動の経営 ⑥学級の生徒指導の経営 ⑦学級の教育環境の経営 ⑧学級事務の経営 ⑨学級の事務を支える外的条件の経営 ⑩学級の教育の評価の経営等々。

いうまでもなく①～⑩の業務は、教育上の領域と機能が混在し、質的・量的にも不揃いである。しかし、学級担任の教師の仕事の多忙さを物語っている。また、「経営」の用語の多出の事実を通じて、教育の合理化、効率化等の願いも読み取れる。更に、学級経営の業務自体の間口や奥行きを適切に精選したり整理したりすることの必要性が考えられる。

学級は、学校の組織的単位であるが、学校の中で孤立して存在しうるものではなく、学校・学年の中で連帯的な課題や責任を担って

いる。一方、学級は、10人10色の家庭に育ち、異なった価値体験の結晶体としての多様な個性や人となりをもつ児童・生徒の集団である。また、学級担任の教師も個性的な世界観・教育観・人間観等に基づき、ユニークな人間としての持ち味を発揮することが要請される。

したがって、これらの調和をいかに保つかどれを強調するかなどによって学級経営の命運が決定されるといえるであろう。

われわれは、先に「学級集団と人間関係(1)」「同(2)」「同(3)」において、学級集団の成立条件、成員の相互作用、指導的意義等を考察し⁽¹⁾、また、「学級経営(1)」で、わが国の近代教育の推移における先達の学級経営の理論や実践を明らかにした⁽²⁾。本稿では、以上の考察を基盤としながら学級の教育の経営的意義や役割を明確にし、学校教育の改善や充実にこたえる方途の究明に資したく考える。

II 学級経営の意義

今日、学級経営という用語は、現場教師の間では日常的に用いられ、格別な定義なしに適用されている。その場合の共同認識は、①学級の児童・生徒が、心身共に安定した状態の中で学校生活が過せるよう、教師が物心両面の状件整備を行うこと。②学級集団の生活や活動を通じて、児童・生徒の連帯性、協働意識、役割分担、リーダーシップとメンバーシップ等を育むこと。③学級担任の教師と児童・生徒との人間関係、児童(生徒)相互の人間関係の深化を図ること、あたりの範囲に

あるということができよう。

ところで、学校担任の教師による学級経営が問われるとき、A教師に対しては、自由放任的な学級経営や狭い学級王国的な学級経営に問題があるから、今少し、他学級や学年全体のことに目を向けた統一のある学級経営、管理的な面にも意を用いた学級経営が求められることもあろう。また、B教諭に対しては、学級担任の教師の指導意識、管理統制的な考え方を後退させ、児童・生徒の子どもらしい雰囲気や主体性、自主性を極力尊重する学級経営が要請されることもあろう。ここにおいては、学級担任の教師の教育力が問われているのである。つまり、「学級の教育」という面からの学級経営の課題性、更に、A教諭、B教諭の例のように、それぞれの学級の児童・生徒との間の出会いの関係を生かした学級経営の創造が求められているとみることができるのである。

学級経営に関する先導的研究をみても学級経営の概念規定は必ずしも一致してはいない。しかし、その傾向性から把握できる特性の数例について、以下に述べてみよう。

(1) 学級経営を条件整備の観点からとらえる。

制度的に定められているのが学級であるが必ずしも教育的要件が十分に備わっているとはいえない。学級担任の教師が、学級集団の教育的条件を整備し、組織的な教育を効率的に進める営みを強調する立場である。

宮田丈夫氏は、「学級を場とする児童・生徒の人間形成の過程は複雑なものである。このような複雑多様な人間形成の過程をとおして全人教育を実現するという場合、そこにはさまざまな条件整備が必要とされるようになる。この点については、物的な面での条件整備と人的な面での条件整備が考えられよう。まさに学級経営とは、このような条件整備の機能を果たすものになっているわけである⁽³⁾」また、学級経営研究の端緒として、授業の渋

滞要因と学級経営を関連づけて、次のように述べ、結果として学級経営の機能論と結びつけているのも注目し値する。「どのように教材研究が深められ、指導法に熟練した段階においても、いぜんとして授業が渋滞する。その渋滞要因を分析してみるとそこには二つある。その一つは物質的な面での渋滞要因であり、他は人的な面での渋滞要因である。前者は施設や設備の点での不備が問題になっており、後者は子どもとの人間関係のゆがみ、ないしひずみが問題になっている。いずれにせよこのような両者の渋滞要因を取りのぞかなければ、学級目標の望ましい実現は不可能になる。このような渋滞要因を取りのぞくという機能をもっているのが学級経営である。換言すれば、学級経営は条件整備という性格のものであり、また機能のものである⁽⁴⁾」

(2) 学級経営を組織化機能の観点からとらえる。

学級が、児童・生徒の学校生活の基地的な役割を受持ち、学習や生徒指導が多数の教師や多様な場面で実施されることに注目し、学級集団の中で学級教育として組織化する機能を重視する立場である。

吉本二郎氏は、学級経営を「児童・生徒の教育上の基礎集団である学級の教育条件を整え、学校教育の目的を効率的に達成させることをいう。従来からよく言われてきた学級管理が、学級の秩序維持に重点を置くのとは異なり、学級教育の組織化機能に重きを置いて考える⁽⁵⁾」また、「学級を単位として教育を展開することは、現代学校教育では常識化しており、それゆえに学級を単位とする教授・学習と生徒指導の統括は、学級経営として重視されるのであるが、わが国ではとかく、学級経営といえば学級の和という程度の感覚でとらえられる傾向がある。現実的感覚としては、そのような学級集団が問題視されようが学校教育の目的を達成する学級の教育を視点とす

るとき、学級における学習効率をも目標視すべきである⁽⁶⁾」更に、学級経営を広義に解し、教科の学習指導をも含めると教科教育の概念をあいまい化する恐れを指摘しつつも、次のように述べている。「教授・学習のための学級経営には、授業そのものは経営ではないとしても、教授・学習活動の直前にまで至る教育的な配慮と営みは、すべて学級経営の問題である⁽⁷⁾」

(3) 学級経営を教育指導の集合作用（インテグレーション）の視点からとらえる。

学級経営を機能としてとらえ、学級生活の全体に目を向け、調和的、統一的、効果的な学級生活を目指す立場である。広義には、(2)と同次元に立っているといえよう。

伊藤秀夫氏は、「学級経営は学級の教育指導を幾つかの領域に分けたその一つではなく、学級活動の全体、学級生活の全領域を集成し、それによってそれぞれの指導の効果をより高めようとするはたらきである。教育指導のインテグレーション、それが経営である。学級が望ましい姿で生活できるように、学級生活の全般に目を配り、毎日の学級活動を展開する教師の実践的な工夫や努力を、学級経営とよんでいる⁽⁸⁾」

(4) 学級経営を学習指導、生徒指導、人間関係に配慮し、学級教育の視点からとらえる。

学級経営にかかわる学級担任の教師の活動を、教授を主体とする活動と経営を主体とする活動に分け、後者の中で学級経営に目を向けるという立場ではなく、学級教育の中にこれらを統合するという立場である。見方によると(3)と通ずる考え方であり、また、いわゆる「学級づくり」論の立場の主張に通ずると考えられる面も少なくない。

宮坂哲文氏は、「学級経営とは学校の組織的単位としての学級集団を教育目的の実現に向けて有効に取扱う教師のしごとを指していわれる⁽⁹⁾」と述べている。また、「授業をふく

めた学級経営」の視点に立って次のように述べている。「学級経営を授業外の学級雑務としてうけとっている向きは、今日でもまだ少なくないようである。そうでなくても、学級経営を学級における訓育ないし生活指導のしごととしてとらえる傾向がみられる。授業とは別なことだとする点では同じである。授業も、また、というよりはむしろ主要な学級経営の場面であることにひとびとの意識が向きにくいのはなぜであろうか。それには、おそらく、いろいろな理由があるであろうが、すくなくとも一つの大きな理由は、経営的関心にもとづいて授業そのものをおこなっているひとびとがすくないことにあるのではないか。授業というものが、ほんらい、学級のひとりひとり子どもたちを、また学級集団全体を動かし働かせることだということにまったく無頓着に、一方的な教師中心の一意授業をやっているひとびとが多いことが、学級経営の理解の一般的貧困の原因の一つになっているように思われる。『教科経営』ということばがすでにある程度のことを示唆しているように、授業という行為はそれじたい一つの経営でなければならぬ。授業が教授＝学習過程ということばでよばれ、そこに教師の指導性と学習者の主体性という二つの基本的契機がよみこまれていることになにかも、授業というものの経営の本質が示唆されているということが出来る⁽¹⁰⁾」

以上(1)～(4)において、学級経営に関する四つの考え方を指摘した。いずれも画然と区別した学級経営の性格というよりは、相互に重なり合っている面が少なくない。それは、学級経営を機能として把握する立場が共通しているとともに、そのための条件整備の役割を重視する立場も一致しているためと考えられる。しかし、実際の学級経営の推進において、どこまでを条件整備（基礎づくり、条件づくり）とし、どこからを指導とするかは、必ず

しも明白とはいえない。例えば、児童・生徒と学級担任の教師との相互理解を深めるということは、条件整備ともいえるが、時にはそのことが児童・生徒の学習意欲を高めたり、変容させたりする。この場合は、理解が児童・生徒に対する指導と考えられるのである。

したがって、ここで強調したいことは、学級経営の本質をあいまいにしないためにも、学級経営の仕事の間口を広げ過ぎてはならない点である。つまり、教科指導、道徳の時間や学級活動の指導等、教育課程に基づく指導を除外して、指導の効果を上げるための基礎を築く仕事を学級経営と考えたいのである。

以上の考察から、私は、学級経営を機能としてとらえ、その役割は条件整備と考えたい。つまり、学級経営とは、学級において、児童・生徒の学習の効果を上げるために、学級担任の教師が、人的・物的・運営的諸条件を整備・調整する仕事であると考えている。

III 学級経営の「経営」的特性

学校は、意図的・計画的・組織的な教育機関であり、学校経営によってより高い教育効果を生み出す必要がある。今日の学校がその教育組織として、学年・学級制をとり、学年・学級にそれぞれ「経営」の用語をあて、学校経営とともに、学年経営、学級経営という用語が広く普及している。

その場合、「経営」といっても、学校・学年・学級の各レベルが異なるのに並行して、経営の内容、機能、役割に相違があるのは当然のことである。しかし、その点の理解や実態の把握が不十分なまま、学校経営、学年経営、学級経営というように、「経営」という用語の響きから現代的、合理的、民主的、組織的等々のイメージに結びつけて教育現場の慣習語となっているように思われる。また、学校教育において、児童・生徒の「人づくり」

をする。しかし、企業が物品を生産する経営とは本質的に性格が異なる、という意味から、学校教育は、経営学的研究の対象とすることがそぐわないとする考え方も少なくなかったように考えられる。

しかしながら、学校教育の活動は、全教職員の協力体制による組織活動であり、また、学級も、児童・生徒の組織的な集団活動を欠いては存在し得ない。このような視点からすると、学校教育の活動も経営体的な相貌を呈していると考えることができる。

しかがって、学校は、「学校経営という教育活動を展開すべきものであり、その点から、学校教育の一単位である学級の経営は確実に行われることを必要とし、その学級の経営が可能とされるためにも、学級をもって組織される学年社会が、生徒集団、教師集団の組織活動を必要とし、さらに生徒と、教師との集団活動が組織化され、この組織化という点において学年主任の存在を理論的実践的に確立し、そこに学年経営の実態が展開されてくるのである⁽¹⁾」

昭和30年代初頭、アメリカの行政学者ギュリック (Gulick, L.) の組織論が日本にも紹介された。彼は、「組織化の問題は中心にある執行権と周辺に分業各分野との間に連絡及び統制のすぐれた網の目を張りめぐらす問題となる」として、組織論を4段階に分けている。この4段階を学校経営の組織に適用して本山政雄氏は、概略次のように述べている⁽²⁾。

第1の段階は職務の確定であるが、学校経営の場合には、各学校とも学校教育法、学習指導要領などに定めた教育目標をもとにして、地域、父母・児童・生徒の実態に基づいて学校組織全体の経営目標、各委員会等の目標をはっきりさせ、その目標に応じて各構成員の職務を決定しなければならない。

第2の段階は組織の指揮・監督の設定ということであるが、組織の能率的運営にはこの

ことは大事と思うが、学校の場合の指揮・監督には特殊性がある。学校のいろいろの組織に責任者、連絡調整者、指導助言者を置くと考えるべきであろう。

第3の段階は、組織全体をできるだけ分業化し、仕事を分割して能率をあげることを説いている。たしかに工場などでは仕事を分業化し、単純化することが仕事の能率を増進するのに欠くことのできないことであろう。しかし、学校経営組織においては、極端な分業ということは学校の能率を上げることにはならない。教育の仕事は精神的価値を生み出す仕事であり、人格と人格との全面的接触を必要とする仕事である。

第4の段階は、監督者と末端分業との間に命令機構を確立するということであるが、学校経営の場合においては、指揮・監督ということよりも、協調・調整・指導助言に重点をおくべきであろう。

更に、本山氏は、ギュリックの「最高執行権者としての仕事は何か、彼は何をするのか」という問題に対する彼の定義として有名なPOSDCRBという新造語とその活動を概略次のように紹介している⁽⁴³⁾。

P (計画—Planning) 企業の目的を達成するために実行を必要とすることがら及びその実行の方法の大綱を立てる。

O (組織化—Organization) 本格的な命令機構を確立して、それを通じて分業諸分科を定まった目標に合致するよう整理、確定、調整する。

S (充員—Staffing) 職員を募集、研修し、快適な勤務条件を維持する全人事機能。

D (指揮—Directing) 決裁を下し、それを特別及び一般の命令及び訓令に具体化してその企業の規範たらしめるところの連続的な仕事。

C (調整—Coordinating) 一つの仕事の

多くの部分を相互に関連させるといふきわめて重要な職務のこと。

R (報告—Reporting) 執行権者が責を負っている人々に現に何が行われているかを関知せしめること。したがって、記録、調査、視察によって自分自身及びその部下もそれについて知識をつねに持っていることを包含する。

B (予算事務—Budgeting) 会計計画、計算、監督の形における予算事務に伴ういっさいのことを含む。

「ここに掲げたギュリックの七つの機能的な要素は、いかなる組織の長も自分たちの職務としてこれの達成に努力しなければならないことであり、学校の校長の場合も同様である。……これらの機能的要素を果たすのに注意すべきことは、指揮、命令、監督という権力支配の方法を用いることは失敗することである。……学校教育には特に調整・協調が大事である⁽⁴⁴⁾」

以上の引用により、組織体の経営について目的達成における効率と、指導者の経営機能の能率に高い価値が置かれることがよく分かる。

なお、ギュリックの考え方と相通じ、しかも学級経営の機能と結びつけていると考えられるジョンソン (Johnson, M.) とブルックス (Brooks, H.) の所説に目を向けてみたい。下村哲夫氏は、1979年に、スタンフォード大学のデューク (Duke, D. L.) の編集、刊行による「学級経営Classroom Management」を取上げ、この中でジョンソンとブルックスの研究を次のように紹介している⁽⁴⁵⁾。

ジョンソンとブルックスは、企業経営と教育経営に関する文献から、主要な経営機能を抜き出し、1916年から1971年までに刊行された7点の主要な著作から、次の6種類の機能をジェラント (=動名詞) の形で整理している。

- ① 計画化 Planning (プログラミング・意志決定を含む)
- ② 組織化 Organizing
- ③ 調整 Coordinating (管理を含む)
- ④ 指導 Directing (命令を含む)
- ⑤ 統制 Controlling (再評価, 監視を含む)
- ⑥ 伝達 Communicating (報告を含む)
- ⑦ 養育 Nurturing
- ⑧ 家政 Housekeeping

これらの機能は、PDS方式、即ち、計画(Plan)－実施(Do)－評価(See)－(更新)計画(Plan)という形で動的な把握ができる。また、これは組織活動全体が効率的な成果を生み出すためのPOSDCRB方式(計画化→組織化→充員→指揮→調整→報告→予算化)などと一脈通ずるものである。

一般の組織体の経営においては、目的達成に関する効率、時間・経費・人的能力の活用に関する能率、組織全体の協調・調整に関する民主的人間関係等に高い価値が置かれる。この組織の経営原理は、学校・学年・学級経営の適切な推進の方向、内容、方法に大きな示唆を与えているように考えられる。

ここで、学級経営における「経営」という用語のもつ意義を積極的に確認する必要がある。つまり、学級経営も下記のように、「目標→計画→実施→評価」のマネジメント・サイクルが基本となって成立していると考えられるからである。

- (目標) 学級の一人ひとりの児童・生徒の実態をふまえ、学校経営、学年経営との関連を図って学級の目標設定を行う。
- (計画) その学級の目標の実現をめざし、いつ、どこで、どのような指導を行うか、という学級経営の全体計画を作成する。
- (実施) 目標、計画に基づき、学級担任の教師の人柄を生かし創造的に実践する。
- (評価) 学級経営が適切に実践できたかどうかの反省・評価を行い、目標、計画

などにフィードバックする。

IV 学級経営の内容・条件

先に学級経営の概念をどのように考えるかによって、学級経営の仕事を広義あるいは狭義にとらえる立場のあることを考察した。そして、学級経営を機能としてとらえ、その役割は条件整備と考えたい旨を述べた。加えて、学級経営の仕事を、児童・生徒の学習の効果を上げるために、学級担任の教師が、人的・物的・運営的諸条件を整備・調整する仕事である点にも触れた。

このように、学級経営を機能としてとらえる立場は、学級教育のあらゆる場面に、広義の経営的機能が存在することを認めている。しかしながら、教育課程に基づく指導に関しては諸条件の整備・調整の役割に止まっている。

ところで、学級経営の内容にかかわる整備・調整の対象としての人的・物的・運営的諸条件の内容には次のものが考えられる。

(人的条件) 児童(生徒)間のリーダーとフォロワーの関係、学級児童(生徒)の交友関係、グループ編成、学級における児童(生徒)の立場や役割、フォーマルグループとインフォーマルグループ、学級成員間の親和・反発関係、勢力関係

(物的条件) 教室の色彩、彩光、通風、保温、換気、教室環境の工夫、施設・備品・教具・教材・資料・机の配置、座席の決め方、壁面・背面黒板の活用

(運営的条件) 朝の会・終わりの会、休み時間、放課後、教育相談、安全指導、清掃指導、長期休業中の指導、家庭との連携・協力、学級通信、学級事務

以上の内容・条件の整備・調整が、児童・生徒の学習意欲の喚起や学習の成果等に大きな影響力をもつものである。このような内容

は、一般的に、いずれの学級にも存在する条件であるが、これを適切に統合したり、組織化したりして、個性的、創造的な学級経営に具現化することは、まさに、学級担任の教師の力量の問題に帰着する。したがって、学級経営を成立させる、人的条件、物的条件、運営的条件の基盤をなす教師論の問題を再確認する必要がある。

青木孝頼氏は、このような教師論を踏まえて、学級という場、対象、指導方法を含め、学級経営の内容を次のように述べている¹⁶⁾。

- 学級におけるいっさいの指導のための基盤としての、学級の一人ひとりを理解すること。
- 学級内の集団の構造を把握して、望ましい学習集団・生活集団を育成する手段を講ずること。
- 教室環境を整備し、備品、資料などの管理を行うこと。
- 指導要録をはじめとする学級の事務。
- 家庭・地域社会との連絡・協力。

これらすべてを学校の教育目標、学年目標を受けた学級目標の具現化の線にそって実現していく学級担任教師の指導・仕事が学級経営といえよう。

学級経営の条件や内容は、学習指導要領等に示されてはいない。この点から言うと、学級担任の教師の自由裁量にかかわる事項と考えることもできる。しかし、本来、学校は法規に基づき、一貫した教育目標と方針のもとに運営されている有機的な経営体である。学級は、その中で更に個性的、創造的に経営され、主体的な活動をする一単位なのである。

この意味から考えると、学級担任の教師はその学級の教育に関しては、児童・生徒に対しても、保護者や社会に対しても、また、校長に対しても直接に全責任を負っているのである。しかし、学級をいかに経営するかということは前述したように学級担任の教師によ

ってそれぞれ異なり個性的、創造的なものでなければならない。この基本を踏まえながら学級の実態を明らかにするとともに、学級経営の各領域に応じた計画の概要を示したものが学級経営案である。学級担任の教師が学級経営案を作成する際は、当然、学校・学年において、学級経営の内容についての共同認識が得られている必要がある。それを前提としての学級担任の教師による個性や創造性が期待されるのである。

このような観点から、教育行政機関から学校経営に関する資料等が公にされ、学校及び教師の参考に資している例は少なくない。そこで、東京都教育委員会「東京都公立小学校学級経営の手引 資料第3集」の、学級経営案の内容を引用してみたい¹⁷⁾。

〈学級経営案の内容〉

1 学級の教育目標

学校の教育目標 教育方針 本年度の努力点等の要点 学級の教育目標

2 学級の実態

(1) 学級歴

学級の担任歴 特記すべき事項

(2) 学級の特徴

在籍数 性別 知能指数 優秀児 遅滞児 学習状況 学習問題児 身体状況 身体障害児 病弱児 行動的特性 交友関係 男女関係 要保護児 その他とくに留意すべき事項

(3) 家庭状況 教育的関心

父母の職業・学歴 父母の有無・健否 経済状況 生活状況 住宅状況 学習設備 父母の教育観 希望・意見 児童の状況に対する希望 地域の特性 その他とくに留意すべき事項

3 学級経営の計画

(1) 学級集団の経営

学級集団の指導方針 級風の刷新とその方法 学級集団の構造とその指導計画

学級の組織化と学級会の指導計画（係り活動の計画とグルーピング） 学級集団の指導上の問題とその対策 その他の問題とその対策

(2) 環境の経営

環境経営の方針 学級施設の計画 壁面・空間の利用と整備計画 掲示・展示の計画とその管理 背面黒板の利用 飼育栽培の計画と学級園の経営 その他の問題とその対策

(3) 学習指導の経営

学習指導の方針とその教育方法 各教科・領域の指導の重点とその関連 グループ指導・個別指導の計画 専科教師との関連 その他の問題とその対策

(4) 生活指導の経営

生活指導の方針とその重点 道徳・学級会・児童会・学校行事等との関連 課外指導の方針とその計画 余暇指導の方針とその計画 優秀児・遅滞児・問題行動児・身体障害児・病弱児の扱い方と教育相談 保健指導と安全教育 その他の問題とその対策

(5) 家庭との連絡

家庭との連絡の方針とその計画 父母会・家庭訪問の計画 宿題・家庭学習に対する考えかたとその方針 その他の問題とその対策

4 実践と反省

実態調査の結果の記録とその対策 日常の観察記録 実践の記録とその反省 経営案の訂正案

学級担任の教師が、以上の全項目にわたって記述することは容易ではない。そこで、学期始めに、主要な事項をしるし、実際指導を通し漸次追加記録していく手法が最も現実的であるように考えられる。

この引用資料は、昭和39年に公にされたもので、年代は経過しているが、学級経営論が

大きな実践的な課題であった時代を反映して多角的に整備されており、貴重な参考資料といえる。ただし、3-3「学習指導の経営」の諸内容は、本論で考察してきた趣旨に照らしても、学級経営の範囲を超えている。したがって、「学習指導の経営」の基底となる諸条件の整備・調整の役割までに止め、それ以上に踏み込まないようにしたい。その理由は、全教科の指導をたてまえとする小学校であっても、学級経営における「学習指導の経営」のもつ意味が、純然たる教科指導のそれと概念的に区別して考えるのが妥当と考えられるからである。

V 学級経営と教師の今日的課題

前節で列挙したような学級経営の内容・条件は、客観的には、いずれの学校の学級にも存在するものであるが、これを個性的、創造的、主体的に推進するのが学級担任の教師の役割である。しかし、実践の段階において、いわゆる閉鎖的、学級王国的な学級経営に陥る心配もある。これの予防的意味も含めて、学級経営にたずさわる学級担任の教師の今日的な課題2点について、事例を踏まえながら考察してみよう。

(1) 校内の教職員の機能分化の進展を考え、学級担任の教師としての役割を自覚する必要がある。

〈事例1〉「学担、副担、教科担、保護者等との連携」⁽⁸⁾

① 教科担任の教師との連携

授業における学習指導はもちろんのこと、授業時における生徒指導も、教科担任は兼ねているわけである。したがって生徒の動向については毎日学級担任の教師と連絡をとる必要がある。しかし、本校のように大規模校ではそれも思うようにいかない。そこで比較的近くにある教頭（同一ワークルーム。本校校

舎の造りは一つのまとまりの場を中心に三つの教室が配置されている)と連携し、自分の学級とその教科担任の教師と相互に連絡をとり合うことから始めた。授業中、よい意見を出したり積極的に好ましい行事をしたりした生徒を学級担任の教師に連絡する。……(略)

② 保護者との連携

N君(男子生徒)は2学期にはいって間もなく、学級のS君にいじめられるという理由で学校を休むようになった。母親は教育熱心であっただけに、その責任は自分の子どもにあるのではなく学級にあると考えていた。この学級は自分の子どもにあわないから他の学級に移して欲しいなど、学級担任不信の感情をあらわにしていた。N君の性格は人のいいなりに自主性に乏しく、善悪の判断ができない極めて幼稚な面がみられた。(略)保護者宅で本人をまじえて、父親、兄、母親、学級担任の教師で対策について話し合った。その結果、学校までは必ず母親がつれて来る。帰りも学級担任の教師の連絡によって迎えに来るといふ分担をはっきりさせた。(略)

③ 保健室との連携

夜ふかしをしたり、朝食をとらないで登校したり、肥り過ぎを悩んだりするなど、身体上の病気ばかりでなく、“心”の病気が増えつつある。生徒の保健活動を進めるには学級担任の教師だけでは限界があるので保健室との連携を密接にし、学級の保健活動を盛り上げ、一人ひとりの生徒が心身共に康康で生活できるような学級づくりをしたい。

(ア) 保健室と連携し、保健委員が毎朝健康調査をして、それを指導に役立てる。

(イ) 治療を要する生徒の病気やけが等の状況を“学級通信”で家庭へ連絡、早期治療や予防に努める

(ウ) 視力や耳に異常のある生徒は座席の位置を考慮する

(エ) 身体にハンデのある生徒に対しては、

学級で世話をし、励ましてやる。

(オ) 保健室発行の「健康の窓」(月刊)や長期休業に出される個人宛の「治療の指示」などを用いて的確に指導する。(略)

〈事例の考察〉

社会の価値判断基準の多様化によって生徒の考え方も種々雑多なものになり、学級経営も複雑化してきた。もはや学級担任の教師一人では望ましい学級経営はできにくくなってきた。学級成員の生徒理解も、まず、家庭における生活の状態を知る必要がある。また、教師に対しても、教師そのものの好き嫌い。教科担任の教師に対する親疎の感情から対応の仕方も変わってくる。曜日や時間帯によって身体の不調を訴える神経質な生徒もいる。授業ではさほどの集中力を示さない生徒でもクラブ活動や部活動では見違えるような集中力を発揮することもある。このような多様な側面を学級担任の教師はきめ細かくとらえ、それに対して各分野と密接な連携をとりながら適切な指導を行うことによって、組織的な学級経営ができるといえよう。

一方、最近の学校には、ティーム・ティチングや多様な協力教授組織の工夫が見られる。また、多面的教育活動には、学校ぐるみで多くの教師が指導に当たっている。事例も示しているように、最近には養護教諭、カウンセラー、各種主任等、専門的な立場からの提言・助言が期待できるようになった。これらの情報を、学級担任の教師の立場から統合的にとらえ、学級経営のなかに生かす役割を担っていることを再確認しなければならない。

(2) 学級は、児童・生徒の全人的発達をめざして集団生活を行わせ、発達に必要な経験を与える有機体でなければならない。

〈事例2〉「学級の間人化と学級担任の教師のリーダーシップ」⁽¹⁹⁾

① 学級の間人化への考え方

学級の人間化ということは、つまり、過去の教育に見られたように多くの教育内容に追われ、つめ込み、ゆとりのなくなった学校生活を、生徒中心のゆとりあるしかも充実した学校生活にしようということであると思う。したがって学級においても、生徒の管理を優先する学級担任の教師ではなく、生徒の考えや心情を重視して学校生活を送らせるということである。校内暴力事件で、先生になぐりかかる生徒の言い分には、「先生はオレを無視した。授業中は眠っていていいといった。」「先生はオレたちを不良とって、他の生徒と一緒に遊ぶなといった」というような理由をあげている。これについては、教科指導が優先し、生徒の人間性を認めない、つまり、管理が先行するような指導体制を反省しなければならない。学級の人間化ということは、つまりは学級担任の教師の人間性の問題でもある。学級担任の教師が人間として成長しようと努力する姿がなければ、学級にも人間化は成立しないと私は思う。(略)

② 班ノートにみる教師と生徒の人間関係の深まり

私のクラスは3年B組である。テレビの番組に「3年B組金八先生」というのがあり、生徒と泥まみれになって学級経営にあたる姿が、この番組の人気になっているという。私は金八先生とだぶりはしないが、私なりの3年B組を作りたくてこの組を受持った。生徒たちはこの3年B組にテレビとだぶらせた期待をもってスタートした。2学期の中頃、ある女生徒が、班ノートに「先生は金八先生におよばないし、クラスもいやだ」と書いたことがある。私はその時、この生徒は進学に悩み、クラスの友人関係で悩んでいると思って面接してみたところ、やはり友達から孤立し、それを見ぬけない私に対して不満をぶつけたのであった。しかし、クラスがまとまるに従って、テレビの3年B組以上に、現実的に生

徒たちがお互いに心を開いて、学級目標に近づいていったのは、班ノートによるところが大きい。(後略)

〈事例の考察〉

学級集団を組織化するということは、児童・生徒の人間関係を調整することが基盤となる。それは、児童・生徒に学級における立場を十分に考えさせ、その役割を認識して、責任感と満足感をもって行動できるようにすることである。これは同時に、集団に貢献しようとする意欲をもたせ、社会性、協力性、寛容性、自尊感情、その他の望ましい行動の特性の育成にもつながるものである。

事例にも見えるように、学級の人間化の基本は、児童・生徒が、心身の安定した状態で学級生活を過すことができることである。しかし、学級担任の教師が、児童・生徒のご機嫌とりをしたり、指導性を後退させたりすることではない。児童・生徒はそれぞれの人格をもち、一生懸命に生きようとする願いをもっている、このことを信頼し、尊重して、一人ひとりを生かす教育の推進に努める必要がある。

われわれは、先に学級集団成立の要件を指摘した²⁰⁾。その概要は次の5項目である。①学級の目標や課題について共通理解を持っていること ②学級の成員間に心の交流、連帯感があること ③学級内の役割の分担に共通理解を持っていること ④学級の規律を確立すること ⑤成員の個人的要求が充足されること。

学級集団の生活や活動において、成員の要求が全く完全に充足されるということは必ずしも多くないであろう。しかし、成員が、級友や教師に遠慮することなく、自己の要求を十分に表明できるような場面を設ける工夫をすること、学級集団の雰囲気づくり、人間関係を深めることなどが大切である。これが学級の人間化の基盤であると考えられる。

VI おわりに

我が国においては、最近、教育改革の要請が社会全般から高まってきている。それは、社会の激しい変貌や、児童・生徒のものの考え方、行動等の変化に対応する学校教育の改善への期待が主流となっているといえる。しかし、学校の体質には、伝統や慣習に対して、改革や改善よりも固持の方向に力が注がれる面が、残念ながら少なくないように思われる。

今回の教育課程の改訂は、社会の変化に対応して、豊かな心を持ち、たくましく生きる児童・生徒を育成することが骨子となっている。いよいよ平成4年より小学校、5年より中学校において全面実施されることとなる。

このような転換期に立つ学校教育は、児童・生徒の人間性を大切にできる教育が推進できるか否かによってその命運が決定するといえる。具体的には、学校教育の単位組織であり、児童・生徒の学校内生活全体の基盤を占める学級経営に関し、教師が何を考え、どう取組むかが問われていると考えなければならない。

岐路に立たされた学校教育の責務を自覚し、学級経営の本質の自問自答を通して、その今日的に在るべき実像を追い求めたのが本稿の基本的な姿勢である。その方途として学級経営に関する先行研究や実践に広く目を向け、①学級経営の意義 ②経営的特性 ③学級経営の内容 ④教師の課題、等を明らかにした。

言うまでもなく学級経営の適切な推進には学校経営、学年経営との微妙なかかわりを考究する必要がある。この点に関しては今後も一層考察を続けていきたいと考えている。

<注>

- (1) 福代昭二「学級集団と人間関係(1)」同(2)「同(3)」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第30・31・32集) 1986, 1987, 1988年

- (2) 同上「学級経営(1)」(同上第33集) 1989年
- (3) 宮田丈夫「学級経営の現代化」 明治図書 1966年 P.133
- (4) 宮田丈夫「学級経営」(宮田他編 教育経営事典) ぎょうせい 1974年 P.211
- (5) 吉本二郎「学年・学級経営の意義」(吉本・永岡編 現代学校教育全集9) ぎょうせい 1979年 P.16
- (6) 同上 P.17
- (7) 同上 P.19
- (8) 伊藤秀夫「学級経営の基本問題」(安藤・石・石山他編 続教育大学講座6) 金子書房 1955年 P.8
- (9) 宮坂哲文「宮坂哲文著作集I」 明治図書 1968年 P.234
- (10) 宮坂哲文「宮坂哲文著作集III」 明治図書 1968年 P.162
- (11) 金子孫市「学級経営と学年経営」(山田・中野・飯田・奥田他編 中学校 学級経営事典) 第一法規 1964年 P.12
- (12) 本山正雄「学級経営の組織」(伊藤・上滝・宮坂・細谷・大嶋他編 現代学校経営事典) 明治図書 1961年 PP.72~73
- (13) 同上 PP.75~76
- (14) 同上 P.76
- (15) 下村哲夫「学年・学級の経営」(東・奥田・河野編 教育学大全集14) 第一法規 1982年 PP.15~16
- (16) 青木孝頼「学級経営の内容」(岡本・広瀬他編 小学校 学級経営事典) 小学館 1978年 P.17
- (17) 東京都教育委員会「東京都公立小学校 学級経営の手引 第3集」 1964年 P.16
- (18) 太田忠「第1学年の学級経営」(木川・福代・遠藤編 学年・学級経営の計画・展開・評価) ぎょうせい 1981年 PP.63~66
- (19) 三宅堅「第3学年の学級経営」(同上) PP.98~99
- (20) 同前(1) PP.17~18